

「新型コロナウイルス感染症に対応する看護職員の確保及び最適なマネジメント検討に向けた実態調査研究」の報告書を公表

3つの調査からなる研究を実施

2020年初頭から感染拡大が始まった新型コロナウイルス感染症は、わが国の病院マネジメントに大きな影響を及ぼし、看護管理者にも未知の状況への対応が迫られました。

そのような中、武村雪絵氏（東京大学大学院医学系研究科准教授）が研究代表者を務めた、令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金による厚生労働科学特別研究事業「新型コロナウイルス感染症に対応する看護職員の確保及び最適なマネジメント検討に向けた実態調査研究」（以下、本研究）の報告書が、このほど公表されました。

本研究では、①新型感染症流行時に、病院や障害者施設において感染者をケアする看護職員を確保し、職員の心身の健康を守りながら、他の患者・入所者へのケアの継続を含めて自施設の機能を維持するためのマネジメント方策について、有用な知見を得ること、②新型感染症流行時に、軽症者等用の宿泊療養施設を開設する場合の看護職の確保とマネジメン

トの方法に関する知見を得ることを目的に、3つの調査（表1）が実施されました。

昨年からの新型コロナ対応に関する各施設の実践報告はさまざまな形で報告されていましたが、本研究によって複数施設で共通して実施された方策が管理者の基本姿勢や思考プロセス、教訓や今後の課題とともに抽出され、次なる危機に備えるための貴重な知見が提示されました。

医療施設・障害者施設を対象とした調査結果から

特に、感染者を受け入れた病院、クラスターが発生した医療施設および障害者施設の看護管理者など38名を対象に半構造化面接を行った調査では、感染者を受け入れる時とクラスター感染が発生した時では困難の程度や迅速さは異なるものの、管理者の判断や実践のプロセスは基本的に共通していることが分かりました。また、うまく乗り越えた施設では災害時に準じた体制が構築され、迅速な意思決定やさまざまな資源の投入が実施されたことや、職員の心身の健康と安全を守る宣言と活動が一貫してなされたことが見えてきました。

本研究知見の活用に向けて

本研究で得た知見を看護管理者の皆さまと共有するために、武村氏は日本看護管理学会とともに、研究成果を「新型コロナウイルス感染症対応から学ぶ看護マネジメント10か条」に整理しました（表2）。

なお、同学会により、これらの知見を共有する研修会が以下の通り開催されます（厚生労働省委託事業）。詳細は、同学会のウェブサイト（<https://janap.jp/>）で告知されます。

- 第1回：8月28日（土）18:20～19:20 ハイブリッド開催（パシフィコ横浜／オンライン）
実態調査から見た新興感染症対応に必要な看護管理の基本姿勢（仮）
- 第2回：11月6日（土）13:00～14:30（オンライン）
感染者の受け入れ時あるいはクラスター感染発生時に重要な看護管理実践（仮）
- 第3回：11月27日（土）13:00～14:30（オンライン）
現在、そして将来の新興感染症に備える看護管理（仮）

表1 本研究を構成する3つの調査

①医療施設・障害者施設調査（半構造化面接による質的研究）

感染者を受け入れた病院、クラスター感染が発生した病院および障害者施設で実施された看護職員の確保やマネジメント方策を明らかにする

②宿泊療養施設調査（半構造化面接による質的研究）

宿泊療養施設で実施された看護職の確保やマネジメント方策を明らかにする

③文献調査（スコーピングレビュー）

過去20年間の新興感染症流行時に国内外の病院で実施されたマネジメント方策を明らかにする

表2 新型コロナウイルス感染症対応から学ぶ看護マネジメント10か条

【基本姿勢2か条】

- 非常時であることを宣言し、組織が一丸となって取り組む体制をつくる
- 組織として職員を守るという明確なメッセージを全ての職員とその家族に伝える

【重要実践6か条】

- 感染者に対応する看護職員の選定方針を示し、心・技・体が整う看護職員を見つける
- 感染対策を含むさまざまな人的・物的支援を職員に届ける
- 看護職員が担うべき業務に集中するために組織内の利用可能性のある資源を探し出す
- 最新の情報や院内の情報を速やかに職員に届ける仕組みをつくる
- 組織内の差別的発言・温度差や周囲の風評被害により職員が傷つけられることを防ぐ
- 看護管理者は正解が分からない状況でも前に進むために選択し説明することを続ける

【将来に備える2か条】

- 災害の1つとして新興感染症対応の準備をする
- 地域の医療施設・福祉施設間で相互に協力し合える関係をつくる